

在ある我が身を幸せと思わざるを得ません。

満州従軍記

愛媛県 竹田 永一

私は、大正十（一九二一）年十月十一日、愛媛県に生まれました。昭和十六（一九四一）年徴兵検査を受け甲種合格でした。和船を造る船大工を業としていました。

昭和十七年一月十日、高知市の西部第三十四部隊河野隊へ現役入営。第一期の検閲修了後、三日間の休暇を与えられ外泊、帰郷。家族と嬉しい名残つきない朝夕を過ごしました。

四月二十八日、高知屯営を出発、連隊長殿の訓示後、勇ましいラッパを先頭に高知駅まで行進。沿道いっばいの市民の励ましを受け、列車輸送で坂出へ。四月二十九日の天長節の佳き日、輸送船に乗船、坂出港出帆、途中恙なく朝鮮釜山へ上陸。小学校に一泊。

列車輸送で六日目に、満州国閩島省延吉着。満州独立守備歩兵第二十一大隊第一中隊へ入隊しました。

昭和十七年、十八年は教育と警備勤務に余り変わりない毎日でした。十八年暮に派遣先より呼び戻されて帰隊しました。隊内は南方転出にゴった返していました。同年兵が一装用の晴れ着に数々の携行品を支給され、嬉々としておりました。

部隊に南方転出の動員が下り、第一中隊は残留中隊になり、特殊な通信、暗号、砲、機関銃等の教育を受けた者は抽出されました。そして体の悪い者、入院中の者などが第一中隊に編入されました。三年兵（十五年兵）が満期予定で、池田中尉に引率されて弘前に転出、中隊は六十人余りの淋しい中隊となり、正月を迎えました。

弘前編成の部隊が新しく渡満して来て、満州独立第六十九兵站警備隊に一括転属となり、その傘下に入りました。我々現役兵と比べると十歳位は上の召集兵ばかりの部隊でした。当時の中隊は解散して新しく第二中隊となり、現役兵は各中隊に分散し、召集兵混成中

隊となり、また歩兵砲・機関銃中隊は統合して本部中隊となりました。

人員の減少した部隊は、在滿徵集の初年兵が新たに召集されて入隊したのが昭和十九年二月で、百二十人でした。満州在住者だけに教育水準は高く、社会的地位の高い人も大勢いたようです。

初年兵が入隊して来たのとはほとんど時を同じくして、部隊は錦州に移駐、我が中隊のみ山海関に分駐することになり、入隊した初年兵は全員一括教育ということで、召集下士官では教育班長には適さないとの判断から、第二中隊に全部初年兵教育を依頼したものと、思います。教官は杉浦少尉でした。

山海関では初年兵教育と、折から、万里の長城に出没する八路軍の討伐に明け暮れる最も厳しい日々でした。聞くところによると、山海関の港は当時中共軍の重要な軍需物資の補給ルートだったそうです。

教育中の初年兵も足手まといになるとはいえ、教育のため出動致しました。その都度、戦死者や負傷者は初年兵に限られました。残念ながら未教育に加え、年

齢的にも動作が鈍いのでやむを得ない結果でした。

初年兵教育も終わり、各中隊に帰ると同時に私にも派遣の命令が来て、金州灣大房身に造船部隊が新設されるから、その指揮下に入れとのことでした。関東軍全域から三千人余りの兵隊が集められ、一〇個中隊の編成です。八個中隊が木造船で、二個中隊は石造船でした。

石造船というのはセメントで船を造ります。石造船は三〇〇トン位で、木造船は二五〇トン、三本マストの帆船です。

満州で造ったその船に穀物を積んで釜山から帆を上げて出すと一晩で唐津に着くそうです。吃水きょすいが浅いので潜水艦が魚雷攻撃をしても当たらないとのことでした。

たぐさんの木材が集められ突貫作業が始まり、私は第二中隊に配属されました。ほとんどの兵は苦しい作業でしたが、私は本職なので他の人ほど苦しいとは思いませんでした。昭和十九年には各中隊二隻でしたが、私の第二中隊は三隻目も大半できておりました。

船大工の大型船に慣れた人が数人いたので順調にいったのでしよう。

昭和二十年四月頃からは二カ月半くらいで確実に進水できるようになりましたが、米潜水艦の砲撃が始まり、唐津に着く船は三分の一もなかったそうです。それでも兵隊は汗を流して船を造り続けました。

兵隊は洗濯の暇も無いくらいなので、満人の女の子を各中隊十人余り雇い、兵隊の洗濯物をさせておりました。おそらく日本の軍隊の中で洗濯婦を雇っている部隊は、他にはないだろうということでした。

夜を日に継いで頑張った甲斐もなく、八月十五日には終戦となりました。

九月十八日の武装解除までの間に、満人の暴動が何回か起きて治安維持のため出動しては鎮圧をしました。一番大きかったのは大連豊年製油での暴動でした。満州は大豆の世界的な産地なので、その大豆から油をしぼる会社が豊年製油という大きな会社でした。

油を積み出す船の着く埠頭（一万トン級棧橋）を

持っている程なのです。大きな倉庫が何十棟も並び従業員は何万人もいたということです。その大豆の入った倉庫を満人の暴徒が襲い、ドンゴロスの袋を担いだり、車に積んだりして運び出していました。

鉄砲も何十丁か持っているので民間人では手が出ません。五十人位が出動し軽機関銃二丁を七、八〇メートル手前に据えて一斉射撃、たちまち死体の山、それでも腸が半分飛び出した重傷者が品物を担いで一目散に逃げて行くのを見て、その執念の強さには恐ろしささえ感じました。これは後になって思ったのですが、結局これらの物質は、すべてソ連が自国に戦利品として搬出してしまったのです。あんな悲惨なことまでして鎮圧する必要はなかったのにと反省を致しました。勝手に略奪させた方がよく、私たちが武装解除されてから残った在留邦人に悪影響を及ぼしたのではないかと心配したものです。

ソ連ぐらい卑劣な火事場泥棒はないと、今でも思いますが、これは私の偏見でしょうか。

日本人が日露戦争以降営々として築き上げた、文化

施設、機械、衣料、薬品、食料、果ては鉄道まで、あらゆる物資を超スピードで持ち去っております。日本人が残したものをそのまま、そっくり中国に活用できたら、後年の中ソ対立の歴史的事実は生じなかったと思います。何といっても日本人支配の長かった満州地区でも関東州は、中国本土に比べ、文化、生活水準等突出して良かったことは、中国人有識者も暗に認めております。

九月十八日、武装解除してソ連軍の捕虜となり翌日から早速海水浴場の栈橋の仕事です。大連の裏側にある夏家河子^{カカガシ}という所ですが、ソ連兵は海に干満の差のあることを知りません。湖と同じように思っています。昼仕事が半分しかできないのなら、夜半分しろと言うのです。

九月になると夜の海の中は寒くて、ブルブル震えながら仕事をしました。これからどんなことになるのだろうかと心配しましたが、五、六日で仕事も終わり、次は戦車道路の建設でした。幅一〇メートルの道路で

両側に歩道があり、厚さ一五センチ幅六〇センチと三〇センチ位の石を縦に隙間のないように並べて築きます。最初の工事は旅順から大連まででしたが、後はどうなったか分かりません。四〇トン戦車が二、三〇台通っただけでアスファルトはボコボコになってしまいました。ノルマは厳しく、歩哨と通訳とがうまく行かず夜になっても仕事をしたこともありましたが。兵隊は労働をしますが、将校は労働はありません。これは国際法で決まっていたらしいのです。

昭和二十年十二月二十三日まで道路工事、二十四日トラックで炊事道具、食料と共に凄^{ヒドク}い雪の中を栄城^{エイジョウ}子着^{シヤク}。冬になると戸外の仕事はできないので、ソ連軍兵舎の使役ばかりでした。昭和二十一年四月十六日から三十里堡へ五千人位集結し、飛行場の建設が始まりました。

飛行場の建設工事は厳しく悲惨を極めました。死なない程度に使えとのことらしく、まず貨車で来た袋入りのセメント（五〇キロ）をトラックへ積み替える作

業ですが、二時間もやるとヘトヘトになり、体力の無い者は動けなくなる者もいましたが、えらいもので、何日かやっているとできるようになり、血の汗を流しながら助け合って頑張りました。

仕事はさせても食料はあまりくれません。二センチ位の黒パンを一切れ、高粱ゴリャンのスープに野菜が少し入った塩味だけのものでした。

私たちが運が良かったことは、関東州だったので地の満人が芋や果物を売りに来ましたので、身の回りの物を売っては空腹を凌ぎました。「祖国の土を踏むまで」を合言葉に一生懸命に頑張りました。

七月頃から赤痢患者が発生し始めて、一時の間に多発し、広い飛行場内の一・五キロ程離れた所へ、隔離幕舎をこしらえましたが、八月には一〇幕舎、九月には三〇幕舎にもなり赤痢の大流行でした。最初のうちは幅三〇センチ、深さ五〇センチ位の便所をアンペラで囲っていましたが、後では幕舎いっぱい長い便所になり、幕舎から這い出て来ては穴を跨いで用を足しますが、赤痢なので度々放出したくなるので何人もが

並んでいる様は、本当にこの世のものとは思われませんでした。

日本軍医薬品はすぐに底をつき、ソ連からの補給はないので、広島出身の軍医さんと巽という軍医大尉の人が傷薬のリバノールを飲ませて赤痢をなおしたこともありました。私は炊事係だったので労働はせずのみました。自分の中隊からは一人の赤痢患者も出ずまいと古い蚊帳をできた食事の上に張り、蠅を一匹も入れないようにしました。我が中隊からは一人の患者も出なかった。今でも自慢に思っております。

十一月二十九日、寒さのため飛行場建設中止、自動車で星ヶ浦宿舎へ。

昭和二十二年三月二十二日、大連引揚收容所へ。

三月二十八日乗船。四月二日博多上陸。四月六日解散復員。

顧みれば抑留期間中、一番情けなかったのは日本人同士の密告であり、民主運動のつるしあげであります。ソ連側は良く働く者には、食事を増やすと言ってきますが、それは量を増やすのではなく、同じ柵の中

で遣り繰りをするだけです。我々は自分の健康を損ねてまで働くことはない。しかし生殺与奪の権はムコウサンであるから、「自分の健康と相談して働け。我々の最後の目的は生きて祖国の土を踏むことである」などと云つたら最後、サボタージュの煽動者、反動者にされます。誰かの密告があり、民主主義のお先棒担ぎに徹底的に吊るし上げられます。やるせなく、いらだたく、暗澹たる思いに落ちる一方で、同胞相剋の凄まじさは、目を覆うばかりでした。独裁者スターリンの暗黒政治が身に沁みて応えました。

何はともあれ表面だけはスターリン大元帥ありがとうであり、天皇制打倒、共産主義万歳を、唱えずにはいられない状況でした。彼らソ連の手先となり、同胞を苦しめたあの人は、今どうしているだろうかと思ひ出しております。

たしかに軍隊生活は矛盾だらけ、人權無視でありました。しかし心の通い合う暖かさがありました。その結果規律と団結が生まれたことは事実です。抑留生活は冷酷そのものでありましたが、同じ釜の飯を食い、

共に訓練を受け、苦しみ楽しみ、助け合いの中で過ごした戦友のことなど、人間一代の中でほんの短い一期に過ぎないのですが、何にも増して忘れ難い懐かしい思い出です。長い年月と共に浄化されて、寒かったこと暑かったこと、悔しかったことなど忘れてしまひ、遠い思い出の一つとしてだけ、僅かに脳裏に残るだけになりました。

こうして調査に答えている最中にも、あの初年兵時代の戦友の顔が、次々と浮かび上がってまいります。私はもう残された時間は僅かであるうと思ひますが、もし余命許されるならば、子々孫々に至るまで、戦争の苦勞話を語り伝えて、心の欲するままにポツポツと生きて行きたいと思つております。

最後に、私の結婚は復員後の昭和二十三年一月でした。老夫婦共に元気しております。子供は男の子二人に恵まれ、孫は四人です。

私も老人なりに脳腫瘍、難聴に悩んでおりますが、現在、神社総代のお役目だけを引き続きさせて頂いて

おります。また余暇を利用しては、水墨、俳画、俳句等にも心を遊ばせています。

毎月の八日の日―大戦記念日―には散華した戦友の冥福を祈り、日本の繁栄と世界の平和を切に念じております。

ドンゴロスの兵隊（二）

岡山県 田上 建

留置場から刑務所へ

北青の留置場で半数の同僚と別れた日から一週間経ち、再び呼び出された。今度は警察官の人達と共に三十人であった。外に出ると以前に増して太陽は眩しく、その上今度は足はガクガクして歩けない。暗い二週間の生活がこのようにまでなるのかとさらに驚いた。

出発に先立ち、元警察の黒い作業衣を一着ずつもらった。その時の私達は夏の襦袢と袴下の姿であっ

た。ソ連兵の指示でトラックに乗ると、自動小銃を持った兵が六人乗って来た。トラックは北青駅の貨物のホームに横付けされて、そこで有蓋車に乗せられた。我々三十人は奥に押しやられ、片方の扉を明けた入り口には、賑やかな六人の兵が陣取った。口笛を吹き、大声で歌い、また笑うなど口の休むことを知らない兵隊たちであった。

やがて列車は動き出し、駅に止まる度に物を売る女の甲高い声が聞こえて来た。二駅も過ぎた頃、ソ連兵は持ってきたリュックサックの中から美しい着物を取り出して交換を始めた。日本人の家から持ち出した物であろう。着物を一枚渡す度に、貨車の中にはゆで卵が積み上げられる。あの卵の山をどうするのかと思っていると、空腹を抱えた私達の見守る中で食べ始めた。まず靴の踵で殻を割り、そのまま口の中へ放り込む。口の中から次々と殻を吐き出し、全部吐き出すまでに次の殻を割っている。六人の兵が競争で口へ放り込んで吐き出す姿を我々は茫然として見ていた。一人の兵が三十数個の卵を食べて平然としているのにも